

原子力安全目標にかかる
論点の分析と今後への提言
(2024 年度活動報告)
案 (20241218 版)

2025 年 3 月

日本原子力学会 リスク部会・原子力安全部会
安全目標検討合同 WG

目 次

1. 本WGの活動趣旨
2. 論点と対応方針
 - 2.1 必要性と目的
 - 2.2 位置づけと対象範囲
 - 2.3 目標・指標の種類と論理構造
 - 2.4 指標の判断基準
 - 2.5 活用形態とその効用
 - 2.6 社会受容・合意形成
3. 今後の検討への提案

付録1：WG名簿

付録2：WG会合日時

付録3：原子力安全委員会安全目標専門部会での議論概要

付録4：原子力規制委員会での議論概要

付録5：原子力学会での議論概要

付録6：IAEA TECDOC1874の概要

付録7：欧米各国の安全目標

付録8：安全目標関係の文献

1. 本WGの活動趣旨

我が国においては1900年代後半から20年以上にわたり、安全目標の議論が旧原子力安全委員会、原子力規制委員会、原子力学会などで行われてきている。2000年に旧原子力安全委員会が安全目標専門部会を設置し幅広い視点からの調査審議を行い、安全目標中間取りまとめと性能目標の報告書が発行されたこと、東京電力福島第一原子力発電所事故後の2013年に原子力規制委員会からいままでの議論に関する見解が出され、2018年には原子炉安全専門審査会・核燃料安全専門審査会からの意見が出されていること、そして2021年に継続的な安全性向上に関する検討チームの議論において取り上げられたこと、といういくつかの議論の波はあり、都度、内容は公開されてきた。また、原子力学会においても、2016年に原子力安全部会夏期セミナー開催、2018年に弥生研究会安全目標に関する研究会から文書発行とリスク部会シンポジウム開催、2019年にはリスク部会・東大・電力中央研究所NRRCのシンポジウム開催があった。このように、断続的ではあるが議論が継続されていることは安全目標の重要性が認識されていることと考えられるが、それぞれの報告内容が連携していないこと、最終的に法的な位置づけによる制定には至っていないことがある。

2022年に原子力学会の学会事故調提言フォロー活用タスクフォースから出された「事故調提言フォローを基盤とした未来の日本原子力学会の活動への提言」には、原子力学会として関係機関と今後の進め方についての議論を行うことが必要との提言が出されている。リスク部会と原子力安全部会は、この提言を具体的に展開するために、2024年から安全目標検討合同WGを設置した。

WGは、我が国の安全目標が最終的に正式に制定されることを目指して、多くの関係機関が原子力安全目標にかかる議論に参加できる基盤的なWGとする。このWGを契機にして、原子力学会主催で、関係機関（規制、事業者、メーカー、研究機関、他学協会など）、学会技術部会にも声をかけた専門委員会に発展していけるような会議体を目指したい。過去の検討や海外の検討を調査しまとめることも含むが、それは情報の共有を目的とするものであり、勉強会や意見交換会に留めず、その先の制定につながる活動にすることを目指して開始した。

本WG報告書は、2024年度にWGで議論してきたことをまとめ、来年度以降の活動に資するために策定した。日本における安全目標にかかるいままでの議論を振り返り分析し、海外の安全目標の位置づけと使い方を丁寧に掘り下げ、そこで議論されてきたことを論点として整理した。そのうえで、安全目標がどのような形態でどういう策定形式であることが我が国にとって理想であるのかを、安全目標の要否に立ち戻り考察した。そこから、安全目標の必要性（無ければ困ること、あれば可能になること）、位置づけ（制定の形態）、安全目標体系の構造、定量・定性的安全目標の内容、性能目標・管理目標との関係、規制や事業者の活動への適用法、について学会WGとしての意見をまとめた。特に、安全目標が必要な理由、規制上の位置づけ、対象とする原子力の活動・状態、安全目標の構成、指標とその妥当性、安全目標の適用、社会の見解との関係などをあらためて問いかけ議論した。また過去に行われた多くの文書・文献は公開され検索できるものの、組織別、時系列での整理がないため、検索の容易化に資するアーカイブの構築に努めた。

今回のWGでの議論が今後の我が国の原子力安全目標にかかる検討に役立つこととともに、国としての正式な見解の提示につながることを期待したい。